

## 第1回静岡県緑化推進計画策定有識者会議議事録（要約版）

### （第1部 これまでの緑化推進計画の成果と課題、その要因）

発言者	発言内容
西森委員	（現計画の指標の目標が70%ということだが、その前提となる）現計画が目指す緑化の具体的なイメージはあるのか？
西森委員	市町がグリーンバンクの支店となっているが、レベルには差はないか？市町担当者の育成にも力を入れるべき。
西森委員	配布される球根・種や木の苗は県内で生産されたものか？ 使用する花は地元産のものを活用してほしい。地域事業は産業とつながっていることが重要。緑化の推進は農業の生産とつながるべき。
飯塚委員	芝生普及の動きは最初、三十数年前に起こり、現在までにほとんどの地区が後退してしまった。その後、現在また機運が上がってきている。その最大の要因は世代交代により芝生を経験した子どもだった人々が母親になり、推進役となったから。 事業を長期に継続して行くためには、芝生の普及に関して情熱を持ったトータルプロデューサーがほしい。地域をコーディネートしてくれる人が必要。
水谷委員	高度成長期には、緑の量が不足しており、たくさん配布すればそれでよかった。さらに、当時は、住民の社会参加への意識土壌が緑化に限らず今より高かった。 今は、外的要因で地域を担う人が減っており、お金や苗を還流する仕組みがあっても上手くいかなくなりつつあり、それが担い手も問題だった。
渡邊委員	学校現場から見ると、教育委員会と緑化の課は情報の共有が図られていない。
矢澤委員	花苗の配布はどこの県でもやっている。毎年同じものを一律配るのではなく、宿根草を入れる、種類を変える等の工夫が必要。配布するだけの事業はやめたほうがいい。自分たちの手で育てたものを植えている地域も全国にはある。鳥取では苗から種子を作り、オリジナルの袋に入れて配っていた。 また、花苗は緑化ボランティアに委託して生産してもらったものを使用していた。緑化を推進するなら、花苗の生産の記載が必要では。 作った側も受け取る側も身近に感じ、花への愛着が高まる。
飯塚委員	新潟県長岡市ではボランティアを活用した苗の生産を実施。防災拠点でおこない、そこを活動の基盤としている。
水谷委員	苗を育てることは参加する人達の緑化の気持ちを育てることにもなる。気持ちを育む。（感性価値）そこに込められている思いを分かち合い、価値を見出す。
渡邊委員	新しい価値観を持った人たちと花の会のような従来の人たちが共存できる社会。お互いの価値観を認め合う関係性がほしい。

矢澤委員	本来の景観にあった地元の植生が失われていっている。地元で愛された植物を地元で育てそれを次世代につなげる、そういうストーリーが必要。
水谷委員 (まとめ)	コーディネート役の必要性。緑化のプロをどう巻き込んでいくか、どこに足りなくて、どこに必要とされているのか、を理解し、組織を動かす力が必要。

(第2部 目指す姿と基本方針)

◇論点1 花と緑を慈しむ文化の創造

発言者	発言内容
矢澤委員	<p>育種寺子屋という事業をやっている。子どもたちが自分で交配して世界に一つだけの種を作り、花を咲かせる。夢があると長く続く。来年もやりたいという声から6年間も続いている。将来、子どもたちが緑化推進や技術者の担い手となる。</p> <p>園児なら寄せ植え教室でもとてもいいが、小学生の場合はやって終わりで次につながらない。</p> <p>一般向けにはマイスター制度を実施。地域の公園に入ってコーディネートをしてくれる人を育て、実際の活動の場も与える。自分が地域に役に立つことが学ぶ楽しさにつながる。ボランティアは楽しいもので「自分に得られるものがある」と思ってもらえるように仕向けると長続きする。お金やモノではなく知識を得られるようにする。</p> <p>講師となる頭に立つ人間が重要。ターゲットしては子どもと一緒に何かをしてくれる世代。講座にはベビーカーを押してきてくれる人も。</p>
渡邊委員	刈り込まれた街路樹など、効率的な手入れをすると違う方向に行ってしまう恐れがある。町全体のバランスを考える。公共空間のアメニティの考え方が乏しい。
飯塚委員	里山を知らない世代に残してほしい。高齢者にとっても懐かしい空間。林齢に段階がある里山を整備し、生物多様性を学ぶ機会と組み合わせ、里山モデルを提案したい。
西森委員	地域の個性に合わせた緑化推進、それぞれのエリアで自分たちの自慢できる景観がることが重要。五感で楽しめる花と緑を提案したい。森林公園の赤マツの林には良い香りがあった。
西森委員	花緑コンクールをもっとイベントして広げる。オープンガーデンでたくさんの人に見てもらう。
渡邊委員	学校には、学校地域支援本部など保護者と地域が協力して学校を創り上げていこうとする組織がある。芝生には、管理の大変さがあるが、スタートラインで地域本部に相談があれば、いい方向に進むと思う。
水谷委員 (まとめ)	<p>緑との関わりを幾層にも多様に作っていくことで自分事化する。</p> <p>コミュニティの中で、苗作りや植え付けなどを行い、自分が育てたものに愛着を持てるようなしくみを作る。そのためにも優秀な講師・コーディネー</p>

	ターが必要。
--	--------

◇論点2 花と緑による地域景観の質向上

発言者	発言内容
飯塚委員	おもてなし空間は選択と集中で作っていく。併せて、その後のしくみも考えておく。今ある民間をどう取り込むか、考える。
西森委員	産業とのつながりをつくる。延長線上にある商店街など私有地との連携。人の活動やアクティビティとつなぐ。東伊豆町では黄花プロジェクトでおもてなしの機運を高めた。将来的にはNEXCOやJR、伊豆急行とも協力をしていく。
西森委員	山肌の太陽光発電など、道路や駅などから見えるところは設置を避ける仕組みがほしい。
矢澤委員	おもてなし空間はどこも同じではなく、地域ごとに違ったものもいい。宿根草やハーブも使う。インスタ映えするような。 みんなが参加できるような仕掛け。地域性と関連付けるとアピールしやすい。長野では干し柿色ペチュニアに取組み、オリジナルの花で飾った。ストーリー性を大事に、どこでもやれるものではなく、地域の特色を出せるといい。
渡邊委員	きれいな花のおもてなしはどこでもできる。静岡ならではの見せ方をしてもよいと思う。
飯塚委員	鉢植えや盆栽などの古典植物も人気がある。

◇論点3 社会総がかりの緑化活動

発言者	発言内容
西森委員	緑化事業、これ自体が産業となっていけないと維持していくのが難しい。花卉栽培など商業、農業との連携を持つ。
矢澤委員	小学校に薬草園を作り、効能を学びながら育てると、子どもたちにとって大きな発見にもなる。薬湯は産業と観光になっている。
渡邊委員	SNSなどを活用し、情報の拡散を図る。バーベキューなどのイベントと組み合わせ、緑化活動が楽しい取組として参加しやすくする工夫をし、今まで参加してこなかった人にも呼びかける。
飯塚委員	旅行業界などからも意見をもらおうといい。ネモフィラやコキアの庭園には有料でも1万人の集客があった。静岡県では富士山を核とする仕込みをしたらどうか。
水谷委員	グリーンバンクの役割、位置づけをはっきりさせることが重要。